

29G-pm13

統合型薬物治療学の基盤知識の構築のための教材開発と実践における問題点
○永松 正¹, 大津 史子¹, 灘井 雅行¹, 野田 幸裕¹, 後藤 伸之¹, 森 健¹,
長谷川 洋一¹, 平松 正行¹, 豊田 行康¹, 小森 由美子¹, 亀井 浩行¹,
飯田 耕太郎¹, 田口 忠緒¹, 吉田 勉¹(¹名城大薬)

[目的] 薬物治療学・実務実習までに薬物名や投与量の知識を増やし、講義内容のつながりを学習させるために販売高ベスト 200、日本薬学会編「知っておきたい医薬品選 400」、薬剤師国家試験出題の薬物から必修薬物を選定して、薬学統合教材(ワーキングノート)を作成し、薬物名、投与量、副作用、適応症、薬理作用をパソコンで試験するシステムを構築した。このシステムの問題点や学生の利用状況を調査してシステムを改善する。[方法] 1年、2年、3年、4年次学生にアンケートを行い、その回答を解析した。[結果および考察]「講義に必修薬物が出てきたか」に対し、1、2年生で「はい」と回答した学生が70%と予想外に多かった。必修薬物を暗記したことで講義での印象が残ったかもしれない。あるいは、基礎系科目の教員が意識して講義にこれらの薬物を入れているのかもしれないが、選定した薬物が適切であったと思われる。「講義への興味が増したか」に対して1~3年生で興味が増したと回答した学生が70%以上いた。薬物名等を暗記することで、講義内容に対する興味が増したことが示唆される。「将来役に立つ項目」: 全学年で、商品名がもっと多かった。学生は将来薬剤師になることを意識しているからであろう。興味深いことに1年生の50%が商品名を挙げていた。病院見学、早期体験学習において商品名で説明を受けたためかと思われる。「ワーキングノートを利用しているか」: 1年生は10%、3年生は40%が利用していた。[まとめ] 必修薬物 220 のシステムはかなり機能していた。さらに、学生は必修薬物を学習する意味を理解していることが判明した。ワーキングブックについては利用率が低く当初の目的を達成しているとは言い難く、利用率をあげる工夫が必要である。今後、198個の薬物を追加する予定である。